

平成 21 年 6 月 5 日現在

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2007～2008

課題番号：19730546

研究課題名（和文）

現代アメリカの道徳教育論における幸福に関する基礎的研究

研究課題名（英文）

A Fundamental Study on Happiness and Moral Education in Modern America

研究代表者

龍崎 忠 (RYUZAKI TADASHI)

岐阜聖徳学園大学・教育学部・准教授

研究者番号：80340389

研究成果の概要：

本研究は、アメリカ教育学の近年の動向において散見される、悲劇や受苦から幸福を構想しようとする道徳教育について注目し、それらについての基礎的な理解を中心にして、幸福をテーマとする道徳教育論を再構成しようとするものであった。2007年度では、ケアという臨床的な対人関係のなかで、不幸としての受苦的な経験や悲劇を徹底して他者と共有することによって幸福をめざすという道徳教育の視点を再考することを主たる課題として研究を展開した。2008年度には、悲劇からの回復を幸福として捉えるために、希望と道徳教育との関係を明らかにすることを主たる課題として研究を展開した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,200,000	150,000	1,350,000

研究分野：教科教育学

科研費の分科・細目：4003

キーワード：道徳教育、幸福、ケア、希望、絶望、批判的思考、反省的思考、共感、人間の生存と成長、臨床教育学

1. 研究開始当初の背景

幸福と教育の関係を問い直す試みは、日本の道徳教育では、例えば中学校学習指導要領道徳の内容のなかで、「世界の平和と人類の幸福に貢献する」という道徳性を育むことがその1つとして挙げられているにも関わらず、近年はそれほど積極的に取り組まれてこなかった事実がある。戦前に活躍した牧口常三郎氏のそのような、教育から平和や幸福

を描き出すような研究はほとんど蓄積がないと言える。「幸福感」という言葉があるように、一般的にはあくまでも個人の実感のレベルでしか幸福については語るができない、と考えられるためだろうか。

しかし、道徳教育のなかで、幸福とは何かを考えることはきわめて重要であることを改めて主張した研究が現代のアメリカ教育学に現れた。ケアの意味を再考した教育哲学

者・道徳教育研究者として広く知られる、ネル・ノディングズである (Noddings, Nel. *Happiness and Education* (Cambridge: Cambridge University Press, 2003; Noddings, Nel. *Caring: A Feminine approach to ethics and moral education* (Berkeley: University of California Press, 1984.)). 同氏は日本の近年の教育学や看護学にも影響を与えたケアリングの思想家として知られるが、近著ではケアが幸福へとつながるはずだ、という視点を明確に打ち出している。*Happiness and Education*の冒頭部分でも、「幸福と教育とは適切に結びついている。幸福は教育の1つの目的であるし、よい教育は個人の幸福にも共同の幸福にも大いに貢献するべきである(p.1)」という認識を示している。

他方、実際の教育場面におけるケアや情熱、幸福を再評価しようとするのが、ダニエル・リストンとジェイムズ・ギャリソンを編者とした著作である (Liston, Daniel P. and Garrison, Jim W. (eds.) *Teaching, Learning, and Loving: Reclaiming passion in educational practice* (New York: RoutledgeFalmer, 2004)). 両氏はともにジョン・デューイの教育思想に大いに影響を受けており、教育における幸福を再考する際に大いに参考になる。

またジョン・デューイを中心にしたプラグマティズムの人間観・経験観を精力的に研究しているのが、ラリー・ヒックマンとトマス・アレグザンダーの両氏である。とりわけアレグザンダーは、ヒックマンの編著書 (Hickman, Larry(ed.) *Reading Dewey: Interpretations for a Postmodern Generation* (Indiana: Indiana University Press, 1998))の巻頭論文で、デューイの経験概念を受苦として分析するという大胆な論考を発表した。受苦や不幸や絶望的な経験を再構成してこそ人間の絶えざる成長に向かうのだ、という主張は、幸福とは何か、生きるとは何か、という道徳教育の本質を問い直す試みと重なってくる。

このような研究状況を受けて、本研究は、アメリカ教育学の幸福をめぐる議論を参照しながら、道徳教育の新たな展開について再考することを目的とする。研究代表者は幸福と教育というテーマをめぐる論文を発表したことがあるが、受苦から幸福な経験を再構成するプロセスを十分に検討できたとは言えず、再考の余地はまだ残されていると考える (龍崎忠「幸福の追求としての道徳教育を構想するための序説：臨床的道徳教育を求めて」日本道徳教育学会『道徳と教育』第318・319合併号、2004年3月、305-316頁)。

近年のアメリカ教育学においては、生きることに必然的に含まれている悲劇や受苦や

葛藤は積極的に論じられるにもかかわらず、日本では教育のなかにある悲劇を意味あるものとして位置づける試みはそれほど盛んではない。むしろ、老病死に代表されるように、できる限り疎遠なものと考えようとする風潮を指摘できるだろう。よって、アメリカの幸福や受苦をめぐる議論を参照しつつ、理論的に正当性を根拠づけられた幸福と教育についての道徳教育の新たな方向性に、深い示唆を与えることを本研究の独創的な点と考える。

2. 研究の目的

先述のような学術的背景のなかで、本研究では、アメリカの教育学の動向を包括的に視野に置くことによって、悲劇や受苦から幸福を構想する道徳教育を生成することが本研究の目的とする。

中心的な課題としては、幸福についての基礎的理解をめざすことを主眼に置きたい。具体的には、ネル・ノディングズをはじめとする、幸福と不幸をめぐる一連の論考を参照しながら、人間の生にとっての幸福のもつ意味を検討してみたい。このような研究構想は、現代アメリカの教育学、ひいてはプラグマティズムの教育思想において展開されている、不幸としての受苦的な経験や悲劇を忌避せず受け止めることに意味があるのだ、という主張と重ね合わせることができる。すなわち、ケアしケアされることを通じて幸福をめざすという教育学本来の意味を再構築しようとする研究動向に着目することによって、悲劇を他者と共有することが幸福につながるという道徳教育論と、その理論的課題について多角的に考察を進める。

3. 研究の方法

基本的には文献調査を中心にしながら、可能な限りで現代アメリカの道徳教育の理論を俯瞰的に捉えながら解明することによって研究を展開した。まず文献調査としては、先に触れたケアリングの思想家であるネル・ノディングズや、教えることに埋め込まれている共感や情熱の意味に着目したリストンやギャリソン、それにヒックマンとアレグザンダーらの思想を研究の対象とする。他にもこれらと親和性があると考えられるのが、「道徳的想像力」を発揮することの意義を明らかにしたマーク・ジョンソン (Johnson, Mark. *Moral Imagination: Implications of Cognitive Science for Ethics* (Chicago: University of Chicago Press, 1993))、芸術論の立場からプラグマティズムを考察するリチャード・シュスターマン (Shusterman, Richard. *Pragmatic aesthetics: Living*

Beauty, Rethinking Art(Boston: Rowman & Littlefield, 1993))、デューイ教育学の流れを受け継いで反省的实践を提起したドナルド・ショーン(Schon, Donald. *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*(New York: Basic Books, 1983))らである。さらにこの他、スティーブン・フィッシュマンとルシル・マッカーシーによる「希望」をデューイ教育哲学のなかに見いだそうとする研究

(Fishman, Stephen and McCarthy, Lucille, *John Dewey and the Philosophy and Practice of Hope*)なども考察の対象とする。現代アメリカの道德教育の理論を俯瞰的に捉えながら解明することを主たる課題としたい。

2007 年にはケアリングを1つの柱として、2008 年度には希望をもう1つの柱として、道德教育と幸福の関係についての理論的課題を探究する。

また得られた成果はできるだけすみやかに報告することにより、それぞれの年度で取り組むべきテーマをより掘り下げることが可能となる。

4. 研究成果

本研究は、アメリカ教育学の近年の動向において散見される、悲劇や受苦から幸福を構想しようとする道德教育について注目し、それらについての基礎的な理解を中心にして、幸福をテーマとする道德教育論を再構成しようとするものであった。2007 年度では、ケアという臨床的な対人関係のなかで、不幸としての受苦的な経験や悲劇を徹底して他者と共有することによって幸福をめざすという道德教育の視点を再考することを主たる課題として研究を展開した。2008 年度には、悲劇的な経験の再構築という視点から幸福を射程に入れた道德教育の構想を果たした昨年度を受けて、悲劇からの回復をもう1つ別の観点、すなわち希望について再考することによって、幸福と道德教育との関係を明らかにすることを主たる課題として研究を展開した。得られた成果は以下のように5点にまとめられる。

(1)ケアの思想家とも呼べるネル・ノディングズの批判的思考理論を、ケアリングとの関わりで検討した上で、それがわが国の道德教育の動向に与える示唆について論じた。批判が意味するものは、一方的な非難や拒絶ではなく、ともに構想し協働するという知的で互恵的であることから、実は道德的成長であることを指摘し得た。

(2)アメリカの初任者研修の具体例を再考した。ケア的な共感的関係のなかで、新任教師

の苦闘が年長の教師らと共有される過程を通じて、それぞれの教師にとっての幸福や希望が実現されていることを明らかにした。

(3)ジョン・デューイの経験概念には、受苦や悲劇の共感的再構成という観点が含まれていること、またそこに彼の言う絶えざる成長の萌芽が見いだされることを指摘した。

(4)ジョン・デューイの『人間性と行為(*Human Nature and Conduct*, 1922)』で示された人間の生存と成長のプロセスを、希望という観点において再検討することを試みた。近年のアメリカの道德教育論で展開されるもののうち、フィッシュマンとマッカーシーの2007年の共著を参照しながら、われわれにとって希望を共有できる地道な関係性を拡張することが成長の契機になることを考察した。

(5)このような人間形成と道德・幸福の関係を基礎的な理論構築として探究するという課題を通じて、臨床教育学の展開について一定の成果を挙げることができた。共著『現場創造の臨床教育学』(明石書店、2008年)において、「新任教師へのケアと臨床教育学」と題した論文で、教師としての幸福な生を送ることは、道德的にきわめて深い意味をもつものであると論じた。

以上を成果としたうえで、今後の課題を長短期両面から記述する。

短期的にはこれらの成果は、部分的に論文にすることができたけれども、全体を通じて書物にまとめる努力を試みたい。執筆中の博士学位請求論文(仮題:ジョン・デューイの相互成長の教育学)を急ぎ完成させ、刊行したい。

長期的には、幸福な生を送ることが道德教育の1つのテーマとなりうることを訴え続けたい。このことは道德教育の授業論とのかかわりが小さくないと考えられるために、具体的な指導プランを視野に据えた授業モデルの構想を伴う。また、「生きる力」を重視する昨今のわが国の道德教育に対しては、幸福をめぐる道德教育は、学校教育にとどまらない、相互成長をめざす生涯にわたる人間形成を考える点において、深く広く示唆を与えるものと位置づけられる。

一方ではこれまでの先行研究を受け、他方では比較考察を通じて新たな道德教育を模索する本研究の試みは、アメリカの思想であるプラグマティズムの人間形成論の可能性を改めて検証することでもあったことから、デューイの言う「経験の再構築としての教育」を再評価ことにもつながり、日米におけるデューイ解釈に新しい視点を提供することにつながることも併せて予想される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計4件)

龍崎忠「臨床教育学の動向とデューイ(4):「希望の教育学」をめぐって」日本デューイ学会、平成20年10月13日、筑波大学(東京キャンパス)

龍崎忠「臨床教育学の動向とデューイ(3):「受苦としての経験」をめぐって」日本デューイ学会、2007年10月21日、奈良女子大学

龍崎忠「協働的なものとしての教師の成長:コロラド大学ボルダー校のPIEプログラム」アメリカ教育学会、2007年10月13日、北海道教育大学岩見沢校

龍崎忠「ノディングズの「批判的思考」論が道徳教育に示唆するもの」日本教育学会、2007年8月29日、慶應義塾大学

[図書](計1件)

田中孝彦・森博俊・庄井良信、明石書店『創造現場の臨床教育学』、2008年、446頁(うち、龍崎忠「新任教師へのケアと臨床教育学」(200-217頁)を単独執筆)

6. 研究組織

(1)研究代表者

龍崎 忠 (RYUZAKI TADASHI)
岐阜聖徳学園大学・教育学部・准教授
研究者番号: 80340389

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし